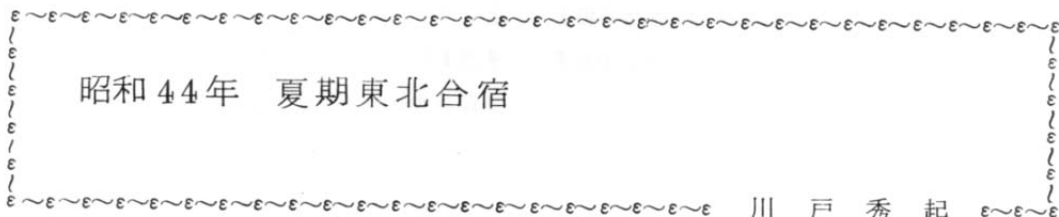


昭和44年 夏期東北台宿

川戸秀起

昭和44年 夏期東北台宿

川戸秀起



我々は夏合宿として、技研が数年来活動の場としてきた黒部を離れ、新たな未知なる新鮮味を求め、東北朝日岳の三面川源流に目を付けた。その溯行記録の資料はとうとう手に入らず、東北における他の溯行記録を地図とで対比させながら想像する以外になかった。我々にとつてまったく未知なるこれらの沢を完全溯行をしようという意欲に燃え、大阪を出発した。

7月29日 ○ 20時45分「北国」で大阪出発する。

7月30日 ● 現地連絡本部である高橋利博さん宅にお邪魔する。

7月31日 ● のち ● ニ大雨注意報が出される。荷物を途中までデポ。

8月 1日 ◎ 時々 ● ニ B.C 三面小屋に入る。

8月 2日 ◎ 時々 ● 沈殿

8月 3日 ◎ 時々 ① 竹之沢と岩井又沢を下部から偵察

8月 4日 ○ 下降ルンゼの偵察と沼倉山へのデポ。

8月 5日 ◎ のち ● 沈殿

8月 6日 ◎ のち ● 強沢に入るため出発したが天候の状態により途中から引き返す。

8月 7日 ● 雨の中を出発したが天候悪化のため引き返す。

8月 8日 ● 強 沈殿

8月 9日 ● のち ◎ 上源十郎沢と下源十郎沢をトレーニング。中野さんが B.C に入る。

8月10日 ● のち ① 金堀沢隊、中ノ俣沢隊出発

8月11日 ◎ 黒倉沢隊出発

8月12日 ◎ のち ● 黒倉沢隊 B.C 帰還
食料購入、村上より帰還

8月13日 ●

8月14日 ● 中ノ俣沢隊 B.C 帰還

8月15日 ◎ のち ① 金堀沢隊 B.C 帰還

8月16日 ○ 竹之沢、相模沢隊、岩井又沢隊、以東沢隊出発

8月17日 ○

8月18日 ○

8月19日 ○ 以東沢隊、岩井又沢隊帰還

8月20日 ① 竹之沢、相模沢隊帰還

8月21日 ◎ 時々 ● 下山

〔以東沢〕 メンバー 中野・越智・山本

→ 16日、B.C 出発、林道により竹之沢出合まで行く。沢身を溯つたり道なき道をかき合けて進みナタ倉滝（岩盤にナタの目のような滝口を持つている）を越えて風倉沢を少し越えた所でビバークとする。17日、再び道を辿り廊下状本谷を抜け、数箇問沢出合約300m手前から溯行を始め、ムキ沢と以東沢の出合に着く、ムキ沢は廊下が続いているようで、以東沢はゴーロ状河原である。快適に飛ばしゴジリデ沢出合で昼食、小法師沢手前でビバークとする。途中泳げないYが、へつりの時手をすべらせ釜へ飛び込むという騒動もあった。18日、巨岩が階段のように折重なつて急傾斜となつた沢芯を形成している。滝を越え快適に飛ばし稜線の以東小屋に出る。19日 B.C 帰還

〔金堀沢〕 メンバー 川戸・越智・藤本

10日、林道を沼倉山まで登り、下降地点から少し入ったブッシュの中にツェルトを張る。

11日、相模沢出合から50m手前に落ちている小ルンゼを下る。そこから左岸を高巻き相模沢を越えた所でビバークとする。12日、アブザイレで河原に降り河原地帯を快適に進み金堀沢出合に着く。少し行くと谷はS字状にわん曲し滝は白い水しぶきを上げて噴出している。昼頃から雨が

降り出したので雨具を身に着け徒渉を繰り返し進む。奥小滝沢に着きブッシュの中にビバーク地を整地する。13日、あいかわらずの雨で川は音をたてて白波を上げ流れている。高巻きを重ねて進むと二股に出る。右股を200mほど入った所をビバーク地とする。14日、夜中に雨が降り、水量は減る事を知らない。ゴーロ状を快適に飛ばすとゴルジュに変わる。ゴルジュを過ぎると河原になり、すぐ2枚の大障壁に囲まれた狭い廊下が行手を阻む。壁の高さは40~50mもあり廊下の間隔は4m程である。その中に落差13m2段の滝がはまり込み人を近づけそうにない。その壁の左壁にうまくルートを取り、苦労して抜ける。徒渉を繰り返し行くとゴルジュになり谷は蛇のようにくねりながら続くようになる。そこをなおも行くと中失峰に突き上げているルンゼをつめ、稜線に出る。そこから南西からの強風にあおられながら狐穴小屋に入る。15日、B.C帰還

〔中ノ俣沢〕 メンバー 四方・松本

10日、11日、金堀沢に同じ。12日、アブザイレで河原に降り河原地帯を快適に進み中ノ俣沢出合に着く。最初から泳がされるはめとなる。昼過ぎに大釜を持つた落差80m2段の滝に行手を阻まれる。午後沈殿。13日、出発して間もなく滑滝群が現われる。途中から高巻きワカバ沢で本谷に降りる。そこから滝を直登で抜けて行くと谷も狭くなつて来る。廊下を高巻き沢芯に降りると二俣に出る。960m地点、そこでビバークとする。14日、尾根筋から善六ノ池に出てB.C帰還

〔竹之沢・相模沢〕 メンバー 川戸・苗村

16日、踏跡程度の道を出合まで行く。兩岸とも露岩を程し、へつりを続けながら進む。泳いだ

り高巻きをしたりして廊下を通過して行くと落差5mの滝に出る。そこを高巻き途中にビバーク地を見つける。17日、絶えず廊下に阻まれ、へつりと高巻きと泳ぎの繰返しである。進むにつれ険悪になり、とうとう200mほども続く廊下に行手を阻まれる。悪戦苦闘の結果、高巻きで抜けた時には午後6時過ぎていた。小滝沢の手前でビバークをする。18日、廊下に阻まれながら進むと三五衛門沢に出る。少し行つた所から高巻くと眼下に落差6mの美しい瀑布を見る。瀑布から尾根上に岩壁が派出し高巻きを面倒にさせた。そこからずっと高巻きを余儀なくされ相模沢出合にアブザイレで降り立つ。昼ではあつたが出合にビバークする。19日、今日から相模沢に入る。竹之沢に比べ水量はだんぜん少なく快い。たえず岩壁に挟まれての溯行だが水量が少ないせいか快適に滝を登りながら進む。種々の滝の連続でどんどん高度をかせいで行く。途中2回も大峭壁が前方をさえぎり変化に富んでいて面白い沢である。何十もの滝を越えて行くと900m地点に着いた。そこから相模山が見え稜線まじかという感じである。そこにビバークとする。20日、少し河原地帯を行くとゴルジュとなる。滝の数も多く兩岸も狭まつているのでバランスクライムによる滝登りが多くなる。チムニークライムなどにより細い谷を溯つて行くとゴルジュが急に切れ開けた地点に出る。そしてルンゼを一気につめる稜線に出る。B.C帰還

〔黒倉沢〕 メンバー 中野・苗村

道を辿りブッシュを抜けると出合に出る。

へつりを繰り返し進む。F₁ (落差40m)で急に谷は狭くなり正面の壁で左折している。そこから滝や河原を通過して行くと大上戸山が遠望出来る所で谷は広くなりゴーロ状を呈する。そこから快

適に行き、草で被われた赤崩れを通過、だんだん谷は狭くなるが水量は多い。露岩地帯を行くと谷はS字状に蛇行しだし、ゴルジュになる。本谷と水量を2分する小沼倉沢を越え、ゴーロ状を行くとゴルジュに変わる滝群を越えて進みツメでビバーク。12日、小雨が時々降る中、ゴルジュ地帯を小滝を越えて行き稜線へルンゼをつめ、大上戸山頂から30mほどの地点に出る。昼食の後帰還

〔岩井又沢〕 メンバー 四方・松本

16日 林道を行きブッシュを漕いで出合に出る。徒渉を繰返し進む。ルンゼの水量は少なく快適に飛ばす。昼食の後30mほどの廊下を高巻き、そこから左岸通しに進みワカバ沢を越えた所でビバークとする。17日、快適にビッチを上げ畑沢

出合に来る。ここで水量は3対1に分けられ、しばらく瀬が続く廊下に急変する。中ノ俣出合で本谷は右折し、再度廊下となる。谷は蛇行し高巻きで行くとガツコ沢に出る。沢芯は滝のみで側尾根下部は総スラブであり、ルンゼは本谷にも増して急傾斜で逃げ場はない。そこで左岸を高巻き西ノ俣沢に降りビバークとする。18日800mの右岸ルンゼ出合のすぐ先は深い釜を持った20m滝15m滝が連続し、通過不可能で900m付近より何ら変哲の無いルンゼが扇状に稜線へと突き上げている。

そこを南寒江山へ向う。源蔵ノ池に降りてビバーク。19日 B.C帰還

(工学部3回生)

私感 - 合宿成功の陰に -

四方 立夫

私達が何も知らずに車中で眠っている頃、目的の東北朝日岳は1晩で200mmの豪雨に襲われていた。それ故、三面川の姿は氾濫という以外表現の語は無い程であつた。入山して10日間は計画の行動が取れなかつた。雨とガス、しかも谷底とあつては景色も見えず、日増しに意気消沈していくばかりで、三年生として出来たことは、トレーニングを兼ねたルンゼ漕りだけであつた。山行の日々を充実したものにする手段も知らず、夜話しの一つもしてやれない自分の人間味のなさを痛感せずにはおれなかつた。換言すれば、立派な後輩を育てる事も合宿の目的ならば、単なる技術高揚というらつばけな物ではなく、一人の探検マンとなるベースを築くべき場を持てなかつたことによる。

人は「そのリーダーが立派であつたか否かは、その時の新人がリーダーとなつた時の活動によつ

て結果は出る。」という。私はこれは最終結果だと言いたい。というのは、合宿が執行面、運営面の蟬集されたものであるなら、第一の結果は、その合宿が無事成功した否かにより、第二のそれは、他に記録として認められたかに掛り、第三が上記のものだと思う。そして今合宿は一応第一の結果は正であつたとみたい。しかしこれは決して私達の力で手中におさめられたものではない。7日間の合宿延長、ひとたび沢に入つた時のファイト、この表に現われた力は、OB諸兄、部友、高橋氏による精神的な支え無くして誰が語れようか。これこそがクラブの歴史に培われて来たものであり利己的個人に埋没する者には、その力は正に無縁のものでしかなく、逆に、主体的個人においてのみ、サークルというものは意義あるものとなるのではないだろうか。

(工学部3回生)